

昭和36年度種付牛受胎調査 並びに 昭和34年度配布精液による産子調査

秋永寛雄， 芝 浩 章 ， 鹿岡 昭 司

1. 総 括

種 類	人工授精 頭 数		受胎 頭数	不妊 頭数	受胎不 明頭数	平均授 精回数	受胎率(%)		昭和35年度産子成績			
	実頭数	延頭数					実頭数	延頭数	雌	雄	性別 不明	流産
乳牛 (本調査)	3	3	3	0	0	1.0	100.0	100.0	2	2	0	0
〃 (内閣省)	2,885	5,111	1,529	662	696	1.8	69.8	34.6	533	538	458	53
和牛	15	18	10	3	2	1.2	76.9	62.5	5	3	0	1

2. 乳牛受胎成績の分析

(1) ホルスタイン種雌牛

別受胎成績

名 前	産地	人工授精 頭 数	受 胎 数	不 妊 数	受胎不 明頭数	受 胎 率 (%)	
						実頭数 に対する	延頭数 に対する
カーネーション モデルマスター	米田	3	3	0	0	100.0	100.0
第4カーネーション モデルマスター	当場	249	146	54	49	73.0	35.5
第11サープロリリー フィンランド	若手塚	417	200	110	107	64.5	31.3
イムペリアルベツシ トリスター	当場	602	313	113	176	73.5	38.2
第21エムパイヤ クオーカローベル	見渡道	115	60	32	23	64.5	28.9
第19ガバナ ベツスローマイルキング	〃	355	180	93	82	65.9	34.9
ロベスマトキヤツア サンデー	〃	433	251	92	90	70.2	39.2
イムペリアルミトリ ワートリスター	当場	574	298	132	144	69.3	39.8
スプリングキーフル アムサダー	〃	96	51	27	18	65.4	31.2
スプリングホープス ベツスローベル	〃	44	28	7	7	48.6	34.5
計		2,888	1,530	662	696	69.8	34.6

(2) 内国産ホルスタイン種雌牛の季節別受胎成績

季節別	人工授精頭数		受胎頭数	不妊頭数	受胎不明頭数	受胎率(%)		備考
	実頭数	延頭数				実頭数に対する	延頭数に対する	
春	243	1,107	316	138	189	49.6	34.4	4月~6月
夏	810	1,571	411	238	169	63.3	29.3	7月~9月
秋	523	1,078	333	121	170	73.5	35.9	10月~12月
冬	801	1,335	467	166	168	73.8	40.0	1月~3月
計	2,385	5,111	1,527	662	696	69.8	34.6	

(3) 内国産ホルスタイン種雌牛の地域別受胎成績

地域別	人工授精頭数		受胎頭数	不妊頭数	受胎不明頭数	平均授精回数	受胎率(%)	
	実頭数	延頭数					実頭数に対する	延頭数に対する
区内	88	136	13	20	55	1.4	39.4	16.0
北多摩郡(市町)	781	1,296	214	272	225	1.9	47.5	24.6
南多摩郡(市町)	25	50	12	11	2	2.0	32.2	25.0
西多摩郡(市町)	184	3,415	1,191	309	335	1.9	78.9	38.7
郡外	156	214	47	30	79	1.4	41.0	34.8
計	2,385	5,111	1,527	662	696	1.8	69.8	34.6

(4) 雌牛の回数別受胎成績

回数別	人工授精頭数	受胎頭数	不妊頭数	受胎不明頭数	受胎率(%)
1回	1,665	913	304	448	75.0
2回	401	321	145	135	68.3
3回	318	167	70	61	65.0
4回	178	83	59	54	58.5
5回以上	125	43	64	18	40.2
計	2,385	1,527	662	696	69.8

(5) 前年度との比較

年度別	人工授精頭数		受胎頭数	不妊頭数	受胎不明頭数	平均授精回数	受胎率(%)	
	実頭数	延頭数					実頭数	延頭数
35	2,762	4,747	1,381	854	328	1.9	44.9	35.8
36	2,385	5,114	1,527	662	696	1.8	69.8	34.6

3. む す び

以上の調査結果を要約すると、種雄牛別、地域別、季節別ともに顕著な傾向はみられないが、地域別では、西多摩郡が最も受胎率が高く、以下、南多摩郡、北多摩郡、区内の順に低下し、また、季節別では、夏季における受胎率が、前年に比し、少々低下していることが認められる。

而しなから、全般的な傾向として、受胎率は、少々低く、このことは主として、多頭数飼育化への進展に伴う辨別力の不足、及び、耕地の減少などによる飼養環境の劣悪化等に起因しているのではないかと思われるので、省力管理、飼養改善に関する技術の普及徹底をはかる必要があると思われる。